



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	丑松と職業：『破戒』論( fulltext )
Author(s)	大井田,義彰
Citation	香椎潟(56・57): 15-25
Issue Date	2012-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/134790">http://hdl.handle.net/2309/134790</a>
Publisher	福岡女子大学国文学会
Rights	

# 丑松と職業

## 『破戒』論

大井田 義彰

### 一 僧職と教職

かつて大塚楠緒子が「破戒とあるから、必定これは若い僧侶が主人公に成つてゐて、修行の中途、さまざまの誘惑を受けて煩悶した結局、終に仏の戒を破つて墮落してしまふ、斯ういつた様な筋であらうと思つてをりましたが想像は違ひました」

（『破戒』を評す）と述べていたのはよく知られているが、

『破戒』というタイトルから「僧侶」の「墮落」の物語を思い浮かべる読者は昔も今も必ずしも少なくないはずだ。おそらく藤村自身も多少はそのような効果を狙っていたのに違いない。《期待の地平》を裏切ること、それもまた作家の醍醐味の一つであるからだ。

ただ、楠緒子は「想像は違ひました」と記していたものの、その「想像」はまったく見当外れだったというわけではない。いうまでもなく『破戒』には、「蓮華寺では下宿を兼ねた。」と

いう冒頭の一文から「信州第一の仏教の地」（一一）とされる飯山の寺院の描写が積み重ねられ、また、実際に蓮華寺の住職という、地位も名誉も手にした身でありながら養女に思いを懸ける、いわゆる《破戒僧》が描き出されていたからである。

彼は「世間的な僧侶に比べると、遙かに高尚な宗教生活を送つて来た人」で「額広く、鼻隆く、眉すこし迫つて、容貌もなか／＼立派な上に、温和な、善良な、且つ才智のある性質」（十五―四）とされている。それにもかかわらず、若いころから「女狂ひ」（十七―七）だけは止めることができず、外に子どもを儲けたうえに五十一歳にもなつて、ついに義理の娘のお志保にまで手を出そうとしていたのである。

川副国基の報告によれば、『破戒』刊行直後この小説を読んで、蓮華寺のモデルとされる飯山の名刹真宗寺の住職であった「井上師（井上寂英―引用者注）は激怒し、井上師夫人は「藤村の馬鹿もの」といって憤られた」（『破戒』と飯山<sup>②</sup>）とのことだ

が、あきらかに「道義感に疑いをもたせる」（川副）と評されても仕方のないこのような設定を、あえて『破戒』に組み込むことによって、いったい藤村は何を企図していたのだろうか。

たとえば十川信介はかつてこの問いに、「丑松の破戒と対照的な姿を持つこの破戒は、前者を明らかに照らし出し、『社会』のしくみを裏側から暴露するために必要であった。」（二つの破戒<sup>③</sup>）と応えていた。ただ「露見した罪だけが罰に値する」、つまり、正直に秘密を打ち明けた丑松を放逐し、その一方で、隠し通した任職をそのまま放置した、けつして公正とはいえない「社会」の力を確認し「以後の自分の戦い方をも発見した」というのである。藤村論といたらなかなか見事な解答だろう。

だが、ただそれだけなら、たとえば蓮太郎襲撃の罪をすべて手下に負わせて高柳を救うといった、より効果的な設定がまだまだほかにありそうだし、そもそも丑松は十川のいうように、本当に「戦わざる敗北」を喫していたのだろうか。

というのは、彼は結局自身の「破戒」行為によって打ち捨ててしまうことになる小学校教員という自らの職業について、首尾一貫して次のように考えていたからだ。

功名を慕ふ情熱は、斯の友人の手紙を見ると同時に、烈しく丑松の心を刺激した。一体、丑松が師範校へ入学したのは、多くの他の学友と同じやうに、衣食の途を得る為で

——それは小学教師を志願するやうなもの、誰しも似た境遇に居るのであるから——とはいふもの、丑松も無論今の位置に満足しては居なかつた。（十一—三）

いうまでもなく、長野の師範学校以来の友人で同僚の土屋銀之助から送られてきた、農科大学の助手として転出が確定した旨の「手紙」を読んだの丑松の反応を記した箇所だが、彼はその報告に「烈し」い嫉妬を覚える。「今の位置」、すなわち「小学教師」という職業に「満足しては居なかつた」からである。

この後、「素性が素性なら、友達なんぞに置いて行かれる積りは毛頭無いのだ。斯う嘆息して、丑松は深く銀之助の身の上を羨んだ。」（十一—三）と続くのだが、だから、「師範校」に課された「義務年限の終り」を待って、彼もまた「他の方面へ出る」つもりでいるのである。

そして、望んでいた時期でもかたちでもないにしろ、結果的にはそのわずか一カ月後に、少なくとも彼が夢見た転職という希望だけは叶えられていたわけで、とすれば、それを一概に「敗北」とだけいってすましていくわけにはいかないのではないか。小学校教員の職を辞すことは、彼の年来の強烈な願いであったからである。

このことは、むろん丑松の転職後の職業として予定されているテキサスでの農場経営の手伝いという仕事をどう評価するかという問題とも深くかかわっているのだが、『破戒』の末尾

で「御機嫌よう。」(二三一四)の言葉を残して飯山を離れる丑松は、おそらくこれまでいわれているよりはかなり解放感を覚えていたはずなのである。

『破戒』の末尾に書き込まれている丑松のテキサス行きについては発表当初、「何となく厭らしい奴隷じみた挙動」(鶉浜生「小説破戒を読む」)などと評された彼の告白の仕方とセットで、早くから「逃げ」(野間宏)だとか「矛盾」(三好行雄)などという見方が一般に流布してきた。が、それはあくまで部外者の視点であって、丑松自身は何ら咎められるべきでない。もともと彼は「道理が無い」(一一四)差別の一犠牲者にすぎないからだ。

それよりも問題は彼自身の生き方、さらにいえば、その具体的な在り方としての彼の職業意識にあったように思われる。

## 二 小学教師

先に丑松が自らの職業を単なる「衣食の途」(十一—三)としか考えず嫌悪してきたことを見てきたが、もちろんそれには理由がないわけではなかった。

町々の軒は秋雨あがりの後の夕日に輝いて、人々が濡れた道路に群つて居た。中には立ちとどまつて丑松の通るところを眺めるもあり、何かひそ／＼立話をして居るのもある。『彼処へ行くのは、ありやあ何だ——む、教員か』

と言つたやうな顔付をして、酷しい軽蔑の色を顕して居るのもあつた。是が自分等の預つて居る生徒の父兄であるかと考へると、浅猿しくもあり、腹立たしくもあり、遽に不愉快になつてすた／＼歩き初めた。(一一二)

たとえば『破戒』冒頭近くの右の一節などにその一端がよく示されているのだが、当時、小学校教員は一般にさほど敬意を抱かれない、というよりむしろ「軽蔑」の対象とさえ見做されていたらしいからだ。町の人たちのそのような視線に反発を覚えつつ、丑松がこの直前、「多くの労働者が人中で感ずるやうな羞恥」(一一二)を感じていたのも、また、時期を見て「他の方面へ出る」(十一—三)画策をしていたのも、それだからこそにはかならない。

だが、もう少し長期的スパンで眺めれば、明治になつて新設された小学校教師という職業が、何も初めからそのような低い地位に置かれていたわけではない。一八七二年(明治五年)九月に開校した東京師範学校の最初の入学者五十四名のうちのほとんどが元士族であり、他の多くの師範学校でもやはり同様であつたという報告(三好信浩「国際比較より見た近代日本の教師像—教師の権威をめぐって—」)などからも窺えるように、日本の小学校教員は当初それなりに社会的威信があつて、「東京の開成学校や工部大学校などに、全国から士族が集まつてきたように、師範学校もまた立身への捷徑とみなされた。」らし

いのだ。たとえばかつて唐澤富太郎も「明治前期」の教師について、次のように語っていた。

明治前期における教師は、自らを観念的には職業における教師というよりも、一種の聖職選職としてうけとつていた。否教師を職業として見るということが出来なかつたのであり、強いて云うならば天職と名づけられるものであつた。<sup>10)</sup>

教育には「聖職選職」という江戸以来の意識が明治維新後も根深く残っていて、たとえ俸給はさほどでなくとも、明治前期の社会において、教師はそれなりに敬意を持たれる仕事であつたといふのである。そして、そのような意識が一気に変わっていくのが、まさに『破戒』が書かれる一八九〇年代から一九〇〇年代にかけてのことであつたのだ。よく知られているように、この時期日本は日清・日露という両戦争を戦わなければならず、国民国家の創成の必要に迫られ、まず何より子弟に最低限の教育と体力とを身に付けさせなければならなかつた。そのため、石川啄木の小説「足跡」(『スバル』一九〇九年二月)などに詳しく描かれているように、地域ごと、学校ごと、学級ごとに「就学歩合」を競わせたりして全国規模で必死に登校を促し、その甲斐あつて児童の就学率はこの間飛躍的に上昇を遂げ、男女合わせてのそれは一九〇九年(明治42年)に、つ

いに九十八パーセントを超えることになる。<sup>11)</sup> 文部省(現・文部科学省)編『学制百年史』(一九七二年十月 帝国地方行政学会)に拠れば、一八八五年(明治18年)の時点の平均値はまだ五十パーセントにも達していなかつたから、わずか二十年余で二倍近くも増加したわけだ。

そして、就学児童が増えれば必然的に教員の数も増やさなければならなくなってくる。一八九〇年(明治23年)以降の教育改革の多くはまさにその対策に向けてのものといつてよく、国や地方は財政維持のため、大量の教員を採用するのと引き替えに、一人当たりの俸給を著しく低く抑えるという政策を採つた。それによつて、それ以前は「聖職」として多少は敬われていた教師が、安月給で誰でもなれる職業だと見なされ、たとえば石川三四郎の有名な「小学校教師に告ぐ」(『週刊 平民新聞』第五十二号 一九〇四年十一月六日)などが看破していたように、徐々に侮蔑の対象に変わっていくのである。このころ、国木田独歩の「酒中日記」(『文芸界』一九〇二年十一月)を筆頭に、小学校教師を主人公に据えた数多くの小説が書かれているのも、あきらかにその境遇の激変ぶりが世間の耳目を集めていたのと無縁ではないだろう。先に見た丑松に向ける飯山の人たちのまなざしも、まさにそのような時期のものにほかならない。

「功名を慕ふ情熱」(十一—三)の持ち主であつた丑松が自らの職に安住してられないのも偏にそのためだといつてよいかと思うが、注意しなければならないのは彼が、それにもかかわ

らず、在職わずか三年目にして教員仲間の「首座」(二二二)という立場に置かれていたことだ。というのは、続いて「銀之助」でも師範出の若手。いかに校長が文平を慕顧(ひいき)だからと言つて、二人の位置を動かす訳にはいかない。文平は第三席に着けられて出たのであつた。(二二二)と記されていたように、いふまでもなくその地位が、日々の仕事の結果や個人の實力などではなく、「師範出」という彼の学歴によつて保証されていたものであつたからである。さもなければ、たとえ「校長よりも男女の少年に慕はれて居た」(五一二)としても、また、いくら若年層が活躍した明治期だからといつても、文平のようにめばしい係累もない二十四歳の若者がわずかの期間でそのような「席順」(二二二)に就けるはずはない。つまり、丑松は学歴という明治国家を支える基本的制度の庇護を受けながら、あたかも無垢の青年でもあるかのように、「同じ人間であり乍ら、自分等ばかり其様(そんさま)に軽蔑される道理が無い」(一一四)と、その体制に違和を覚えていたことになる。

### 三 大量雇用

丑松が風間敬之進や仙太ら、いわゆる弱者にしきりと同情を寄せているところを見れば、彼の「首座」教員という地位に幾分かは人柄も関与していたのではないかと思われにしても、その大部分はあきらかに「師範出」という学歴によつていた。校長や郡視学の例を挙げるまでもなく、人間性は社会的立場に

本来的にほとんど関与しないからである。そればかりか、むしろ作中にも「賢いと言はれる教育者は、いづれも町会議員などに結托して、位置の堅固を計るのが普通だ。」(二二二)と記されているように、いつの時代であっても「位置」はざる賢さや偶然によつてもたらされることの方が多いのではないか。

だから、丑松がその地位を「師範出」という当時の小学校教師としては最もオーソドックスでまたオーソリテイもあつた学歴によつて手に入れていたとしても、何ら非難すべき事柄ではない。もともと学歴そのものからして、多分に本人の努力や能力の結果でもあるからだ。

しかし、丑松の所属する教員組織が極めて雑多で、彼がその頂点にかなり近い位置にしながら、組織それ自体を否定していたとなると若干事情が異なってくる。

男女の教員は広い職員室に集つて居た。其日は土曜日で、月給取の身にとつては反つて翌の日曜よりも楽しく思はれたのである。茲(こゝ)に集る人々の多くは、日々(にちごと)の長い勤務と、多数の生徒の取扱(とらへ)とに疲れて、さして教育の事業に興味を感ずるでもなかつた。中には児童を忌み嫌ふやうなものもあつた。三種講習を済まして、及第して、漸く煙草のむことを覚えた程の年若な準教員などは、まだ前途(さき)が長いところからして楽しさうにも見えるけれど、既に老朽と言はれて髭(ひげ)ばかり厳(い)しく生えた手合などは、述懐したり、物羨(ものねら)み

したりして、外目にも可傷しく思ひやられる。一月の骨折の報酬を酒に代へる為、今茲に待つて居るやうな連中もあるのであつた。

(二一四)

これは丑松が勤務する学校の「土曜日」の「職員室」のようすを描いた一節だが、さすがに一九一九年(明治32年)から足掛け七年間に渡つて小諸藝塾に勤めていた藤村の手になる記述だけあつて、なかなかその雰囲気をよく伝えているように思われる。たしかにそのせいか、正宗白鳥の「是は小学校といつても実は中学校のやうに思はれます。」「『破戒』を評す」という指摘にあるようなニュアンスも感じ取れないわけではないが、いづれにしろ、ここに写されている週末の学校の解放感はいまでも諸処で多少は窺えるのではないか。ただ、右の「職員室」が近年の学校のそれと大きく異なっているのは、そこに集う教員たちの多様さとまたやる気だろう。

引用箇所の中ほどに見られる「三種講習」とは、山田晃の注釈<sup>16</sup>によれば、「準教員養成のための講習。郡役所所在地で、六か月ずつ前期と後期とに分けて催された」ものだということが、その「講習」を受けて教員となつた「年若な準教員」から、どのような経路を辿つてこの学校に勤めているのかよくわからない「老朽」教員まで、じつにさまざまなのである。総じていえば、当時の教員の世間的評価の低さを反映して、責任感と覇気の乏しさが強調されているといえるが、小学校教師のこのよ

うな在り方は、しかし、けつしてこの学校固有のものではなかつた。

たとえば土方苑子は『破戒』の作中世界とほぼ同時期の長野県五加村(現・千曲市)にあつた五加小学校の記録を調査し、一九〇〇年代初頭の同県の「教員の全体的動向」の特徴として、「勤務年数の短さ」と「教師集団を構成する教員の身分・資格の多様さ」の二つを挙げている。どちらも前述した当時の急ごしらえの教員養成の結果に起因するものだが、前者については、五加小学校では「平均すると一年間に一学級当り三人(の教師―引用者注)が交替」していたそうで、後者に関しては、この時期通用していた「長野県小学校教員の免許状種別」として、何と十七種類もの免許状名が列挙されている。「国に財源を収奪されて村財政が乏しいため、安価な教員で済まざるを得ないという状況」であつたため、多様な「免許状」を乱発して大量の俄教師を雇用していたのである。「一学級当り」の教師の「交替」の多さも、むしろその影響にはかならない。そして当然のことながら、「免許状」の種別はそれを持つ教師の給料にも跳ね返つた。土方によれば、一九〇〇年(明治33年)の時点で、五加小学校の訓導の月給の平均が十九・〇円であつたのに対し、準訓導のそれは半分以下の六・九円、その他臨時雇いの教員のそれは五・二円であつたそうだが、安月給の代名詞とされた小学校教員の中にも免許や採用形態の違いによって、さらに幾つもの身分・階層が設けられていたのである。

『破戒』にはむろん俸給の多寡までは記されていないのだが、これを仮に丑松たちに当て嵌めて考えれば、正教員で「首座」の丑松はおそらく、「検定試験から入つて」（十六―三）「準教員に成つたばかり」（一―二）の勝野文平より、二、三倍もの給料を得ていたことになる。

また、土方は同じ文章で、丑松の飯山赴任二年目に当たると思しき一九〇二年（明治35年）六月の長野県郡視学会議の「第一問題」として、「小学校職員上下ノ秩序乱レ相互ノ調和ヲ失シ全校ノ精神的統一ヲ欠クコト」が取り上げられ討議された旨を紹介し、その事例として「生徒の成績」の「退歩」や教員の「酒宴」「放歌」、授業放棄などを挙げ、「教員への管理の強化の必要性はこのような事件が起きるたびに管理者によつて強く認識された」と記していたのだが、そうだとすれば、安価な教員の大量雇用の結果ともいえるこれらの「秩序」の「乱レ」への対処法として、『破戒』の校長が「教育は則ち規則である」だとか「時計のやうに正確に」だとかいう方針のもとに「職員一同を指揮」（二―二）しようと企てていたのも、あながち否定すべきことではなかったのかもしれない。

#### 四 学問と労働

丑松は何層にも渡つて身分や階層が設けられていた当時の教員組織の中で、比較的高い位置にいながら自らの職に満足していなかった。もともと教職自体の社会的評価がかなり低かつた

ためだが、いま一つ、そこには多分に上司の教育方針や同僚の責任感のなさなども絡んでいたと考えられる。「到底今日の教育界は心ある青年の踏み留まるべきところでは無い」（十一―三）とは先に示した銀之助の手紙の別箇所だが、この認識はおそらく丑松その人のものでもあつたに違いないのである。

ただ、丑松の場合、天真爛漫な銀之助と違って、時にそれが次のような職業意識となつて湧出することがあるのは注意しておく必要がある。

零落——丑松は今その前に面と向つて立つたのである。

船頭や、櫓曳や、まあ下等な労働者の口から出る言葉と溜息とは、始めて其意味が染々胸に徹へるやうな気がした。

実際丑松の今の心地は、今日あつて明日を知らない其日暮しの人々と異なるところが無かつたからで。炉の火は好く燃えた。人々は飲んだり食つたりして笑つた。丑松も亦た一緒に成つて寂しさうに笑つたのである。（二十一―）

いわゆる《告白後》の「零落」を案ずる一齣だが、丑松は自らが蔑視の対象になつていたにもかかわらず、あるいはまたそれがゆえ、ただ教職を嫌つただけでなくその下に、さらに「船頭や、櫓曳」などの職業を位置づけていたのである。彼らを「下等な労働者」と呼ぶ極めて主人公に近い語り手の口吻には、あきらかに差別意識が窺えよう。丑松はかつて「貧民とか



労働者とか言ふやうなものに同情を寄せるのは不可いかんと言ふかね。(三一五)と憤慨していたのだが、ただ単純に「同情を寄せ」ていただけではなかったのである。

では、いったい彼は何をもって「下等」と考えていたのだろうか。「いつまでも昔忘れぬ従僕しよぶ」(一七七一)として敬之進一家を助ける音作兄弟のような農業従事者でなく、あえて「船頭や、樫曳しやえ」らがその対象に挙げられているところを見れば、単なる肉体労働者を指しているだけでもなさそうだが、たとえば丑松はそのような人たちが多く出入りする場末の飲食店の笹屋で、風間敬之進と次のような会話を交わしていた。

だつて君、左様さようぢやないか、尋常科の教員なぞと言ふものは、学問のある労働者も同じことぢやないか。毎日、毎日——騒しい教場の整理、大勢の生徒の監督、僅少わづかの月給で、長い時間を働いて、克くまあ今日迄自分でも身体が続いたと思ふ位だ。(四一四)

いうまでもなくこれは敬之進の台詞の一部で、まだ若く将来性も有している丑松の場合、敬之進ほどストリートな思いではなかっただろうが、「教員なぞと言ふものは、学問のある労働者も同じこと」という言葉には、おそらく彼も多少は頷くところがあつたに違いないのである。ということはつまり、時代を考えればごく一般的な感覚なのかもしれないが、世代は違つて

も、二人はともに「学問」は貴重だが、それを要しない「労働」は卑しいという認識を抱いていたことだ。これが一世を風靡した『学問のすゝめ』(福沢諭吉・一八七二年二月〜七六年十一月)以来の明治期の代表的職業観であるのはいうまでもない。

だが、はたしてそのような考え方に問題はなかつたのだろうか。というのは、あれほどに「学問」を積んでいたはずの蓮華寺の住職が、それにもかかわらず、自身の欲望を制御できずにいたからである。たとえばその対象となつた娘を案じて敬之進も「彼程学問がくもんもあり、弁才もあり、何一つ備はらないところの無い好い人で、殊に宗教せうけうの方の修行もして居ながら、それでまだ迷が出るといふのは、君、奈何いふ訳だらう。」(一六六七)と語っていたのだが、古くはマックス・ウェーバーも指摘していたように、結局、「学問」は一般に「なにをなすべきか、いかにわれわれは生きるべきか、にたいしてなにごとをも答ええない」(「職業としての学問」<sup>(20)</sup>)のではないか。形式的にはそれなりに「学問」を積んできたはずの校長や郡視学がどこか茶化して語られていたのも、おそらく同じ理由ではないかと思われるのだが、『破戒』においては「学問」は、もともとさほどの価値を付与されていなかったのだ。だからこそ、猪子蓮太郎も『学問の為の学問』を捨て(二一四)実践に走つた。

とすれば、「放逐か、死か」(一九一七)と苦悩する丑松の脳裡をふと掠める次のような思いはいったいどう捉えられるのか。

其時に成つて、丑松は後悔した。何故、自分は学問して、正しいこと自由なことを慕ふやうな、其様な思想（かんがへ）を持つたのだらう。同じ人間だといふことを知らなかつたなら、甘んじて世の軽蔑を受けても居られたらうものを。

（一九一七）

このように、丑松は「学問」によつて「正しいこと自由なことを慕ふ」ようになったと考えているのだが、本当にそうなのだらうか。たしかに彼が蓮太郎の著作や師範学校等で「一視同仁」という言葉に集約的に表現される（岩佐壮四郎<sup>21</sup>）平等思想を学んでいたのは事実だらうが、もしも心底からそれが理解されていたとしたら、けつして「下等な労働者」などという発想は出てこないだらう。つまり、丑松の「学問」もやはり蓮華寺の住職のそれと同様で、多少は視野を広げる役割をはたしていたのかもしれないが、結局は「なにをなすべきか」という問いに答えてくれるほど本質的影響を自身に与えていたようには思われないのである。おそらく出自の隠蔽と立身の手段として利用されたにすぎなかつたのではないか。彼が単純労働を侮蔑し、目の前の子どもたちを育む仕事に生き甲斐を見出せないでいたのもたぶん、それだからこそにはかならない。

そういうえば、かつてウェーバーの紹介者として知られる尾高邦雄がその著『職業の倫理』（中央公論社 一九七〇年七月）

の中で、「勤労の倫理」を「国家本位」「職場本位」「自己本位」「仕事本位」の四つに分類していたことが思い出される。

尾高の区分に従えば、丑松にとつての職業は、あきらかに「自己本位」の活動であり、またその中でも「成功本位」<sup>22</sup>（下位分類）に近いと考えられる。むろん、だからといって取り立てて非難すべきことは何もないのだが、少なくとも彼が自身と社会の接点である職業を極めて自己中心的に捉えているとはいつてよいだらう。

丑松は、だからせつかくの教職という他者への影響力を比較的駆使しやすい職業に就いていながら、それをさほど生かすことがない。むろん、結果的には「長野の師範校の生徒が二十人ばかり、参観と言つて学校の廊下を往つたり来たり」（二十一—四）している日を告白日に選んだことで、かなり未来の教師たちに強いインパクトを与えたことは間違いないが、それはあくまで偶然にすぎず、彼自身が企図したことではない。末尾のテキサス行きについても同じで、たまたまめぐつてきた仕事にすぎないから、単なる「逃げ」（前掲・野間宏）でないのはいうまでもないが、とくに一部でいわれているような「積極的な意味を持つ」（川端俊英<sup>23</sup>）旅立ちとも思えない。まだ二十代前半の青年ゆえ、その後どう変わっていくのかわからないものの、見てきたように丑松が、もともと「成功本位の職業倫理」の持ち主であつたからである。

「どうかして目的と職業とを相一致させようと考へた」（額

の汗」『新片町より』一九〇九年 左久良書房）とは「破戒」執筆当時を回顧した藤村の著名な言葉だが、結局、藤村と違つて丑松が、最後まで父と蓮太郎の二人に言説に拘束され、まだ立身以外に確たる「目的」を持ってずにいたことが最大の問題だったのかもしれない。渡米後の彼の課題は、おそらく尾高のいう「自己本位」「成功本位」の職業観からいかに脱却するかということになるはずである。

### 注

- (1) 『早稲田文学』(一九〇六年五月)。
- (2) 『文芸論叢』第四号(一九六八年二月)。引用は川副氏が飯山訪問時、真宗寺の住職を務めていた井上寂英の孫に当たる井上弘雄氏から聞いた言葉だという。
- (3) 『島崎藤村』(一九八〇十一月 筑摩書房)。
- (4) ちなみに、丑松がこの手紙を受け取ったのが十一月の初旬で、彼が飯山を離れるのは十二月三日である。
- (5) 『慶応義塾学報』一〇三号(一九〇六年五月)。
- (6) 『破戒』について(岩波文庫『破戒』一九五七年一月・解説)。
- (7) 「破戒」論への試み(『島崎藤村論』一九六六年四月 至文堂)
- (8) 真野宮雄・市川昭午編『教育学講座 第十八巻 教師・親・子ども』(一九七九年四月 学習研究社・第一章第二

節)。

- (9) 注(8)に同じ。
- (10) 『教師の歴史―教師の生活と倫理―』(一九五五年四月 創文社・IV 「士族階級より農民階級へ」)。
- (11) 土方苑子『文部省年報』就学率の再検討―学齢児童はどのくらいいたか―(『教育学研究』第五十四巻四号 一九八七年十二月)等参照。
- (12) 第一編第一章第二節「初等教育」より。同書によれば、一八八五年(明治18年)の学齢児童の就学率は、男六十五・八パーセント・女三十二・一パーセントで、平均四十九・六パーセントだったという。
- (13) もちろん、田山花袋『田舎教師』(一九〇九年十月 左久良書房)がその代表だが、たとえば出原隆俊は『破戒』・『蒲団』の周辺―教師・腰弁・空想・自意識(『京都教育大学国文学会誌』第二十二号 一九八七年六月)で、関連作品として、ほかに岡田八千代「鶯」、中村星湖「少年行」、石川啄木「雲は天才である」、中村春雨「巨人」、小川未明「空想家」等の作品名を挙げている。
- (14) もっとも、この「首座」「主座」とも表記されている)という「席順」は、「小学校令」や「小学校令施行規則」などにその規定がなく、山田晃によれば「正規の教員の格付けではないようである。」(『島崎藤村集I 近代文学大系13』一九七一年十一月 角川書店)とのことだ。

(15) 注(1)に同じ。

(16) 注(14)に同じ。

(17) 『近代日本の学校と地域社会 村の子どもはどう生きたか』(一九九四年九月 東京大学出版会) 第二章第二節。

(18) 『破戒』には「下等な労働者」という言葉が二度出てくるのだが、もう一箇所も「權曳らしい下等な労働者」(十六―十五)という表現だ。

(19) 丑松が愛読する猪子蓮太郎の著作の一つに『労働』と題するものがあつたことからはすると、もちろん、丑松が単純に「労働」を蔑視していたとは考えられないが、意識下は別領域のほうである。彼は、たとえば帰省の際にも漂泊の民に対して「自堕落な編笠姿、流石に世を忍ぶ風情もしをらしく、放肆に恋慕の一曲を弾じて、錢を乞ふやうな卑しい芸人の一組もあつた。」(七一―)などという思いを抱いていた。

(20) 岩波文庫(尾高邦雄訳 一九八〇年十一月)改訳より。引用箇所はその中で紹介されているトルストイの言葉の一部。

(21) 『『破戒』のテニス』(『日本近代文学』第83集 二〇一〇年十一月)。

(22) 尾高は同書で「成功本位の職業倫理」について、「職業活動にあらゆる努力と工夫をつぎこむことによって、自己および自己の家族の収入、地位、名声、権力などを少し

でも向上させることが、ここでは当然の義務であり、美德である、と考えられている。」と説明している。

(23) 『『破戒』当時のテキサス情報』(『同朋文学』第31号 二〇〇三年三月)。また、高榮欄「『テキサス』をめぐる言説圏―島崎藤村『破戒』と膨張論の系譜」(金子明雄・高橋修・吉田司雄編『ディスクールの帝国 明治三〇年代の文化研究』二〇〇〇年四月 新曜社 所収)は「日本の膨張地」としての「テキサス」という視点を打ち出している。

\* 『破戒』本文の引用は筑摩書房版『藤村全集』第二卷(一九六六年十二月)に拠り、旧漢字は適宜新字体に改めた。  
―おおいだ よしあき・東京学芸大学教授―